温故写新

写真で見る「かのや」の今・昔

「鹿屋港（古江港）」（古江町）

昔　昭和38年

今

古江は昔から大隅半島の表玄関として海運交通の要地でした。明治30年には古江・鹿児島間に汽船航路が開設し、大正12年には鉄道が開通。昭和38年の写真には、今は無き鉄道「大隅線」が海岸に沿って延びる様子がみてとれます。鹿屋港は昔から沿岸漁業の良漁港としても知られ、今は養殖業が盛ん。現在も市の漁業の中心地となっています。

昔、鹿屋で起きた出来事にクローズアップ！

カノヤタイムトラベル

明治天皇の御料馬が村に！

はるか昔から、百引は周辺の市成・高隈・野方・恒吉・牛根などとともに良産馬地として「驥北」と称されていました。現在の「輝北」の名の由来である「驥北」とは、優良駿馬を産出した中国の河北省・山西省・河南省一帯の総称。しかし明治以降、百引の産馬業は衰退の一途をたどっていました。

明治14年に百引戸長（のち村長）に就任した鶴田重行は、この状況を嘆き、百引村内の産馬振興に精力を注ぎます。優良品種の普及と子馬管理の巡回指導を自ら熱心に実践。次第に産馬業は盛んになり、以前の活気を取り戻しました。

明治26年8月、宮内省の御料牧場の責任者であった藤波言忠子爵が県内の産馬視察に訪れると、鶴田村長はここぞとばかりに村中の馬を集めさせました。村を挙げての熱心さに、藤波子爵は大変喜びました。

明治27年4月、村に突然、電報が舞い込みます。それは「明治天皇の御料馬『藤戸号』を種馬として産馬地・百引村へ下賜する」というものでした。この知らせに村中がわきました。

同年5月に拝受した「藤戸号」は、産馬改良に貢献すると大きく期待され、実際に優秀な子孫を残しましたが、不幸にもわずか4か月後に病死しました。悲しんだ村民は碑を建て、冥福を祈りました。

しかし、村民の「藤戸号」への誇りと愛着は残り、その後も、さらなる村の産馬振興、馬質向上へとつながっていきました。

「種牡馬藤戸号碑」
（市百引多目的グラウンド）

「藤戸号」亡き後、
明治31年に導入した
名馬「第七蘭号」